

図書館だより

埼玉県立図書館

第43号

平成2年3月1日

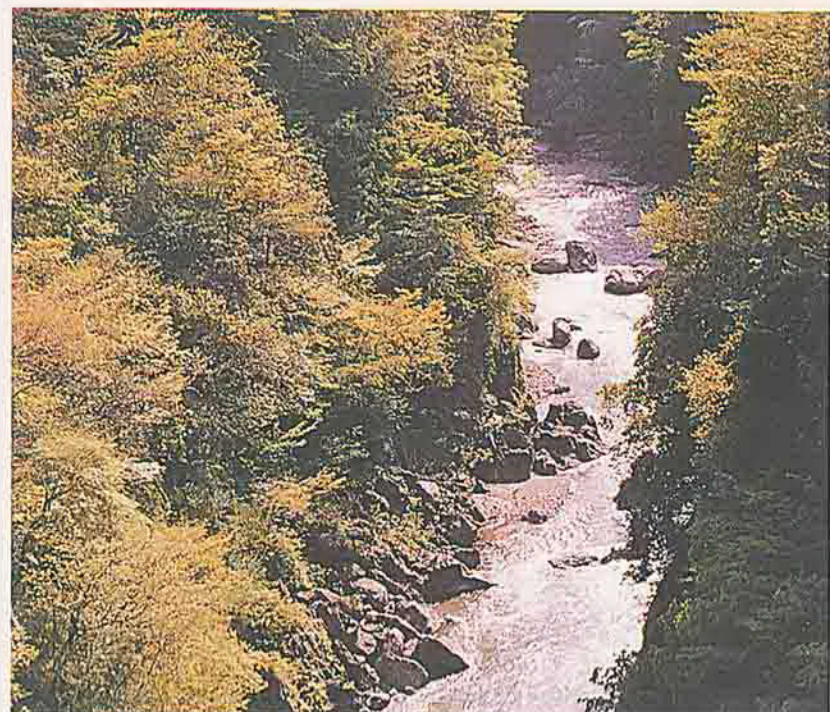
編集 埼玉県立図書館
広報委員会

発行 埼玉県立浦和図書館
館長 栗藤 一 衛
浦和市高砂3-1-22
電話 048(829)2821

埼玉の川特集

(主な内容)

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| ●母なる荒川 (高橋玄洋).....(1) | ●本のひろば.....(5~6) |
| ●国境と利根川 (本間清利).....(2~3) | ●県内施設めぐり、読書グループ紹介.....(7) |
| ●随筆・川と生活文化.....(4) | ●“埼玉の川”アラカルト.....(8) |



(「荒川の清流」清水武甲)

母なる荒川

高橋玄洋

以前『分水嶺』という小説を書いた時、奥秩父の甲武信岳が甲州、武州、信州の分岐点であり、荒川の源流であるのを知った。

足で確かめた源流は岩清水の一滴だった。清水はせせらぎとなり、秩父古成層の岩板を裂き、とうとうとして北に上り、東に走り、再び南に向かつて下る頃には、支流を集めて大河となり、大きく四囲を潤し、人の生活を支配する。

川は水を運ぶだけの道では無い。人に時の流れを教えてくれる。ある時は清らかな歌声を、ある時は濁流と化す厳しさを、人の限界、人の世のはかなさを教えてくれる。

川は暮らしの母、荒川は埼玉の母である。母の有難さを知るのは、母を亡くしてからだった。荒川の有難さは、埼玉の地図から荒川を消してみるとよく判る。恐らく人も住めない砂漠が残るだけだ。

この恵みを、我われ埼玉人は日頃からもつと意識する必要があるだろう。荒川は私たち自身の川だということを。

(作家)



高柳と南流、幸手領八甫(鷺宮町)からは二派に分流していました。このうち八甫から東流した流れは権現堂川と称されましたが、宇和田よりは庄内川、金杉(松伏町)よりは太日川と称されて江戸湾(東京湾)に注ぎました。

一方八甫から南流した流れは利根川と呼ばれ、同じく武蔵と下総の国境を画して幸手・杉戸と南下、小淵田川と称され、梅若伝説や業平伝説が残されています。その後利根川の主流が小淵から大河戸を経、吉川で利根川に合わさる派川に移つてよりは古隅田川と称されました。一方古代には長宮で荒川を合わせた利根川は、吉川、八条と南流し、猿ヶ俣から小合川を分流しましたが、その主流は大谷田と亀有の間から再び西流、千住で入間川を合わせると隅田川あるいは浅草川と称されて江戸湾に入りました。後世この亀有から千住間の流路は、利根川の主流が移つてからは古隅田川と称される河道跡となりましたが、今でもその流路跡は葛

国境と利根川

本
間
清
利

地勢を大きく分けますと山地・丘陵地・台地・沖積地に分けられます。このうち沖積地は河川の流送土砂の堆積によって形成された最も新しい地層といわれます。今から約一万年
前、それまで寒冷な気候が続いていた地球が温暖な気候となり、南極北極を中心に高山に張りつめていた氷河が溶けだし、海の水位が上昇して低地に浸入しました。地殻の変動や土砂の堆積で確かではありませんが、

思川、荒川などが乱流し、流送土砂の堆積で陸化を早めました。この海であったこの地域の名残りは『万葉歌集』の中に埼玉の津などと詠まれています。この陸化の時期は上流と下流では異なりますが、行田あたりには五、六世紀の古墳群がみられますので、すでに古墳期には安定した陸地となっており農耕生活が展開されていたことが知れます。その下流の陸地化時期は明らかではありません。



伊坂の旧利根川自然提防

が、満潮には海が入りこみ干潮には干渴になるという時期が続いたことでしょう。たとえば大同二年(八七)の創建を伝える大房越谷市の薬師堂は、今でも「大江りの」押し入りの「鵜の森の」薬師様と呼ばれています。つまり当時は満潮時には、岡地であつた薬師堂のあたりまで海となつたので大江り、海か押し入つてきたので押入、あるいは薬師堂の森には鵜の鳥が群生していたので鵜の森と呼んだのでしょう。

もちろんこの頃はすでに大和朝廷の基礎は固まり都を平安京に移していましたが、この先大化元年（六四五）中大兄皇子と藤原鎌足が、朝廷をしのぐ勢威をはこつていた蘇我馬子を宮中で殺害、蘇我一族をほろぼすとともに、翌大化二年には各豪族が私有していた土地人民を没収し公地公民制を打ち出しました。同時に税・戸籍・伝馬・口分田などの制度や行政執行区画である国や郡を設けていきました。これを大化の改新、この制度を律令制と称されますが、土地人民を没収される豪族の抵抗は大きく、これが徹底されるのは大化の改新から約五〇年後にあたる大宝二年（七〇二）の大宝律令を待たねばならなかったといえます。以来皇族陵を除

き、豪族たちによる巨大な墳墓は姿を消していくとともに、国には国司郡には郡司が中央から派遣され国や郡の治政にあたるようになりました。ところで国や郡の境界は、何を基

準にしたかといひますと、山地や丘陵地ではおよそ山や丘の尾根づたい平地ではおよそ大きな河川がその境とされました。これを北武蔵（埼玉県）でみますと、西部から北部にかけての秩父山地の尾根づたいが、武蔵と甲斐（山梨）、次いで信濃（長野）次いで上野（群馬）の国境となつていますが、山地を離れると神流川が上野との境となり、烏川と合流するとこんどは烏川が、烏川が利根川（利根川はしばしば変流していました）と合流すると利根川が武蔵と上野の国境を画して東流します。この国郡界制定時には、北武蔵東部に乱流した関東諸河川の流路はほぼ定まっていたようですが、利根川が古河川辺領（北川辺町）の飯積までくると、古河川辺領を迂回した間の川が国境となつていますので、この間の川が当時の利根川主流筋であつたといえますすなわち飯積から北上した利根川は柳生で渡良瀬川（現在の流路は人工改修路）を合わせると下野との国境となり、古河で思川を合わせるとこ

古代の利根川流路



また荒川は山地を離れると、榛沢
 郡と男衾郡、幡羅郡と大里郡、足立
 郡と埼玉郡の郡界を画して流れまし
 たが、小針領五丁台(桶川市)で綾瀬
 川を分流すると、今度は綾瀬川が埼
 玉と足立の郡界を画して南流、浮塚
 (八潮市)よりは東流して埴地先で利
 根川に入りました。おそらく国郡界
 制定時には、綾瀬川が荒川の主流筋
 であったとみられます。それにし
 て
 も当時利根川・波良瀬川・思川・荒
 川・綾瀬川は、それぞれ権現堂川や
 小合川を通じ太日川にも流れていま

利根川・荒川の古代流路をさぐって

みましたが、この流路は自然的にあるいは人工的に変えられて、その川跡がわからなくなっている所が少なくありません。しかし流路が変わっても原則として国郡界は変えられませんでした。すなわち天平宝字二年、(七五)下総国結城郡と常陸国真壁郡の国境を画した鬼怒川が氾濫し、良田二千町歩が沼沢地と化したため、氾濫地を避けて新川を開削し水害地を復興させました。このとき復旧にあたった長官は、神護景雲二年(七六)この新川をもって国境に宛てるべきかと称徳天皇に伺いをたてたところ、流路が変わっても、「国郡界は旧川を以て定とす」との勅令でした。以来国郡界

自然的にあきな改修は文禄初年から同三年（五二）に於て、その川を横断した会野川を主流としていましたが、このとき会野川を新郷で締切つて大越からの浅間川にこれを導き、高柳で渡良瀬川などを合わせる、八甫で南流する利根川を締切り、同時に古利根川と荒川は猿ヶ俣で締切られ、小合川を通じて太日川に、また綾瀬川は新宿で堰止められて亀有溜井に貯溜されました。つまりこのとき浅草川は入間川だけの細流と化したわけですが、慶長年間には広大な河川敷は埋立てられて城下町に造成されるとともに、壮大な江戸城が構築されたのです。この浅草川の細流化は、『三浦浄心の「慶長見聞集」や大道寺友山の「蔭穂集」など、童謡による隅田河原の石合戦でもこれを窺うことができますが、これらはまたの機会に譲ります。



著者プロフィール

大正10年宮城県に生まれる。越谷市役所勤務。越谷市史編纂室長、埼玉県史専門委員を歴任。現在、越谷史文化財調査委員、埼玉県中川水系総合調査委員、埼玉大学講師（非常勤）主著、「御鷹場」「関東郡代」「日光街道繁昌記」「利根川」ほか論文多数。

「坂東太郎」の名で親しまれる利根川、県央部をうねる「母なる川」荒川、県内にはこの他にも幾筋もの川が流れています。川は古来私たちの生活と密接に結びつき、様々な恩恵と脅威を与えてきました。川が運んでくれる水と土は流域に広大な耕地を生み出す一方、その氾濫は人々の生活を脅かすものでした。

今回は、県立図書館所蔵の県内の河川に関する本と16ミリフィルムの中から、ごく一部をご紹介します。

私たちの生活に欠くことのできない水、その水を運んでくれる川をより身近に感じて頂ければ幸いです。

明日の利根川 ゆたかな清流への提言 山崎不二夫編著 農山漁村文化協会、86 (浦・熊・川・久)

土地利用の変化に伴い保水・遊水機能が失われ、様々な問題を抱える利根川の明日を考える。



「埼玉の川」特集

荒川 その土と心 朝日新聞浦和支局編 朝日ソノラマ、77 (浦・熊・川・久)

荒川の流れを遡り、埼玉の風土と人々の生きざまを探る。

荒川 荒川総合調査報告書 一・四 埼玉県、87 (浦・熊・川・久)

昭和58年度から5カ年計画で、広く県民も参加して行われた総合調査の報告書。

荒川 写真集 埼玉県、87 (浦・熊・川・久)

前掲報告書刊行の際に撮影・収集した写真を収める。

荒川関係文獻目録 一・二 埼玉県 県民部県史編さん室、83、85 (浦・熊・川・久)

総合調査の際に使用した荒川に関する広範な文獻を集める。

大利根百話 関東建設弘済会、87 (浦・熊・川・久)

『利根川百年史』の刊行を記念して発刊された。治水事業の変遷、利根川と人々との関り、流域の文化等を記す。

葛西用水路沿革史 葛西用水路普通水利組合、24 (浦)

県東部を貫流する葛西用水の歴史。川越舟運 江戸と小江戸を結んで三百年 斎藤貞夫著 さきたま出版

会、82 (浦・熊・川・久)

江戸時代から約三百年間、江戸と川越を結んだ新河岸川舟運についてまとめる。

川にまつわる埼玉の伝説 埼玉県環境部、85 (浦・熊・川・久)

県内各地の川にまつわる伝説を集めたもの。

関東河川水運史の研究 丹治健蔵著 法政大学山版局、84 (浦・熊・川・久)

利根川水運と商品流通に重点を置き、幕藩権力の河川水運統制の実態についても追求。

埼玉県水害史 昭和22年9月 埼玉県、50 (浦・熊・川・久)



カスリーン台風上陸による各河川決壊の被害状況及び救済活動。

埼玉県の河川改修計画 昭和61年3月 埼玉県土木部河川課、86 (浦)

埼玉県における主要河川の改修計画概要を集録。

埼玉の河川あれこれ 埼玉県土木部河川課、87 (浦・熊・川・久)

県内各地、水辺での憩いの場を紹介。

埼玉の水郷 本間貞治著 ガイド出版社(カラーで見ると釣り場ガイド)、81 (浦・川・久)

写真と地図で県内の釣り場を紹介。

利根川 自然・文化・社会 九学会連合利根川流域調査委員会編 弘文堂、71 (浦・熊・川・久)

昭和41、43年にかけて行われた共同調査の報告。

利根川 本間清利著 埼玉新聞社、78 (浦・熊・川・久)

利根川水系の流路変遷を多数の文献を踏まえながら記す。

利根川水系農業水利誌 農林水産省関東農政局利根川水系農業水利調査事務所編 農業土木学会、87 (浦・久)

古代から現代までの農業水利の変遷。

川と生活文化

高沼用水で考えたこと

与野市は、浦和と大宮にはさまれた、面積八・二八平方km、人口約七万五千人という県内でも小さな市です。その中心を南北に縦断して流れる川を鴻沼排水路(きりしき川)と。そして、まちの中央を東西に横切るたつみ通り以南、きりしき川をはさんで流れる二本の川を高沼用水(東縁・西縁)といいます。昨年の春と秋に高沼用水に沿って、約四キロの道を歩いてみるという、ささやかなイベントをおこないました。それを通じて、見えてきたこと、考えたことを、



高沼用水西縁(与野市下落合)

書いて見たいと思います。

地名は、その土地の姿を示すといえます。市内の鈴谷という地名は「湧水のある湿地の意」、大戸は「沼への入り口の意」という説があります(重塚一三郎『埼玉県地名誌』)。その昔、現在の与野市域の中央の低地帯には、鴻沼(高沼)という溜め池があり、周囲の村々の水田を潤っていました。八代將軍吉宗の「享保の改革」では、幕府の財政再建のため新田開発が奨励されました。県内では、井沢弥惣衛為永による見沼の干拓事業が最も有名です。鴻沼は、それに続いて、享保十四年(一七三九年)から翌年にかけて干拓され新田が開かれたのです。東西の高沼用水は、鴻沼に代わる水源確保のために、見沼代用水西縁から取水する農業用水路として開削されたものです。まちを流れる平凡な川にも、こんな歴史があったわけですね。

川べりを歩いていくと、まちの様々な姿が見えてきます。かつての水田や雑木林が、マンションや駐車場へとその姿を変えた水辺。多くのゴミが川底に沈んでいる用水の姿。それは、わたしたちの「自然から離れた」生活、「使い捨て」文化を象徴するかのようです。その一方、東縁用



高沼排水路(与野市下落合)

水の数カ所では、湧水のある場所を見付けることができます。澄んだ水の周囲には、コイやメダカなどの魚が群れをつくっています。用水の与野のはずれに近い市の南端部にあるモウソウチク、エゴノキ、コナラなどの竹林と斜面林は、わたしたちの目を惹きつけてくれます。また、素堀りの西縁用水周辺のアシ原は、野鳥の生息地となっている数少ない場所の一つです。しかし、そんな心なごませる場所にも開発の波が次第に押し寄せてきているのが、現状です。「農は国の本」であった時代―用水を維持・管理していくことは農民の生活を左右する重大事でした。高

沼でも上流と下流の水争いがあったことが、史料に残されています。

「水かけ論」「水に流す」といった言葉は、わたしたちの祖先がいかに水とかかわりが深かったかを物語っています。各水系ごとに営まれた民衆の「共同体」―その意識を支えてきたものの一つが地域の祭り・行事です。与野の七夕では、七夕飾りとして水辺に生えるマコモを刈り取ってタナバタウマを作ります。マコモというのは、雨がっぱの材料ともなったイネ科の植物です。この七夕飾りは、行事の終わった後で、川に流されました。ハレとケの両方で、川(水)は人々の暮らしと深く結び付いていました。時代が変わり、「農」が衰退していくにつれ、「共同体」意識も、地域の伝統行事も姿を消していきました。

わたしたちが、もう一度、川(水)とのつきあいをとりもどす―それは、かつてわたしたちの祖先が、あたりまえに営んでいた「自然と共にある」生活、「モノを大切にする」文化を復権させることでもあります。そのためにできることは何かを、仲間とともに、考えていきたいと思っています。

(与野の水と緑を考える集い/高柳俊哉)

利根川図志 赤松宗旦著 葛飾北斎画 山田屋佐助 一八五八

〔浦〕 影印本 熊・川・久

安政二年に刊行された利根川及びその周辺の地誌。

利根川ハンドブック 建設省関東地方建設局 87 〔浦・熊・川・久〕

利根川の全貌を豊富な図表と数値で明らかにする。

利根川百年史 利根川百年史編集委員会編 建設省関東地方建設局 87 〔浦・熊・川・久〕

明治以降の利根川改修の歴史をまとめる。

利根川物語 高橋裕著 筑摩書房 〔ちくま少年図書館〕 83 〔浦・熊・川・久〕

流域面積日本一、関東を代表する利根川を人との関わりを中心に描く。

日本の山河 天と地の旅 37 渡辺まなぶ写真 北小路健文 国書刊行会 78 〔浦・熊・川・久〕

航空写真を使い県内各地の様子を紹介する。

花埋み 渡辺淳一著 河出書房新社 80 〔浦・熊・川・久〕

「利根川は関東一の大川である。」という書き出しで始まるこの小説は、依瀬村（現妻沼町大字依瀬）に生まれた日本最初の女医、荻野吟子の生涯を描いたものである。

新河岸川舟運の盛衰をしのぶ

上福岡市立歴史民俗資料館をたずねて

入間川右岸の段丘の水流を早め、川越市の北部をめぐって南下、岩淵水門（東京都北区）下流で隅田川に注ぐ長さ二五・七キロの新河岸川。九十九曲りとも唄われる曲線が多く、それ故に豊富な水量を有したこの川に、正保四年（一六四七）川越城主松平信綱が、新たに河岸場を設けたことにより、新河岸川舟運が本格的に始まったといわれている。

七・八〇石積みの高瀬舟で、川越からは穀物や木材を、江戸から肥料や日用雑貨類を運んだ。仙波河岸から千住花川戸まで一往復七・八日から二〇日かかる並舟、三・四日の急舟、飛切りといわれる特急舟は今日下って明日上る速さであった。

新河岸川舟運は荷物だけでなく、乗客も乗せた。夜を徹して川を下る早舟は、船頭が眼ざましに唄う千住節と岸辺の情景とあわせ極めて情緒的なもので、川越夜舟と称された。秋から冬にかけては薩摩藩を主として野菜を積んだ百姓の素人船頭が漕ぎ出す俗に雁舟が活躍した。

涯を描いたものである。

備前堀 堀江祐司編 きたむさし文学会 69 〔浦・熊・川・久〕

県北の水田を潤す備前堀の古記録を集める。

文学散歩「田舎教師」 羽生市教育委員会 87 〔浦・熊・川・久〕

明治42年、田山花袋によって書かれた「田舎教師」は羽生を舞台とした小説で、作品中には利根川流域の描写が随所に見られる。



分水嶺 高橋玄洋著 三笠書房 77 〔熊〕

東へ利根川・荒川となり太平洋へ注ぎ、西へ千間川となり日本海へ注ぐ甲武信岳の分水嶺。この小説は、

全盛期は文化年間から明治初期まで、鉄道の開設により急激な衰退に向っていく。更に、河川の改修、水量の減少により通船が困難になり昭和六年、終止符をうつこととなる。



読書グループの紹介

読書を楽しむ会

大利根町

―利根のほとり―

「共通の本が読めて、共通の話題がもてれば。」そんな希望を胸に、教育委員会主催の「母と子の読書教室」に参加した者が中心となって発足し、県立久喜図書館の貸出文庫を利用して九年目になります。

毎月第一土曜日の午後定例会を開いていますが、何かと休会も多いのが現状です。会員は、三十代から七十代と年齢層が広いので、本の内容を越えて、それぞれの生活体験を基にした話になってしまいがちですが、得るものも多く、楽しく活動しています。

一回目の文学散歩で、「天の園」の舞台である唐子（東松山市）の代官屋敷の建物が壊される寸前に訪ねることができたこと、又、「堀辰雄原稿執筆の宿を訪ねて」の軽井沢追

そこで10年前に起こった事件を中心に展開する。

緑と清流を歩く フォト・ガイド 埼玉の自然一〇〇選 朝日新聞浦和支局編 きたたま出版会 86 〔浦・熊・川・久〕

「埼玉の自然一〇〇選」の選定を記念して発刊されたガイドブック。

見沼土地改良区史 見沼土地改良区 88 〔浦・熊・川・久〕

見沼代用水は、江戸時代に井沢弥惣兵衛が利水と洪水防衛、加えて通船堀を建設するために行った総合的偉業である。本書はその二六〇年余歴史を記す。

16ミリフィルム― 荒川 中日映画社 73 カラー30分 〔浦・熊・川・久〕

沿岸に住む人々の歴史・風俗・産業等を総合的に描きながら、現在の荒川が抱える課題について考える。川のある街 テレビ朝日 78 カラー20分 〔川〕

新河岸川の浄化活動をきっかけに、地域の問題を自ら責任を持って解決していくこうとする人々の行動を描く。さいたまの川原 埼玉新聞社（郷土埼玉シリーズ） 78 カラー10分 〔浦〕

荒川の上流・中流・下流の川原の

様子を見ることにより、流水の働きと土地の変化を関係づける。

利根川 埼玉新聞事業社 85 カラー30分 〔浦・熊・川・久〕

埼玉県内で九市町を潤し、人々に大きな恵みをもたらしてきた利根川の四季を通して、人々の生活を綴る。利根川 日本シネセル 82 カラーワイド41分 〔川〕

利根川水系にくり広げられた歴史を透視し、利根川の生態を描く。母なる川 荒川 中日映画社 89 カラー30分 〔浦・熊・川・久〕

荒川の自然や歴史、それにまつわる人々の生活等を描き、豊かな恵みをもたらす荒川の素顔を紹介する。多くのビックリ体験 利根川の治水 日映科学 89 カラー35分 〔久〕

昭和22年のカスリーン台風の映像記録、シミュレーションによる堤防決壊の特撮等と交え、利根川の治水の様子と水の力の恐ろしさとを小学5年生の目を通して伝える。

病める川 埼玉県広報課 75 カラー30分 〔浦・熊・川・久〕

病んでしまった川の現状にスボットをあて、「川」とは何か「川」は本来どうあるべきかを問ひかけ、人間と川のかかわり、汚染の現状を訴える。



「梨の花の下で」

分の旅で、書斎等を見せていただき奥様と写真と一緒にできたことが、会の自慢でもあります。

今回、「図書館だより」は埼玉の河川の特集なので、利根川にちなんだエピソードをとのことでしたが、利根川があまりに身近にありすぎて見逃してしまいました。お陰様で、文集「草」第六集は「利根川・水」とテーマが決まりました。決演跡も昨午公園として整備され、洪水の時の経験者も何人か居りますし、良いものができるのではと思います。

会員十四名、移動図書館「おとね号」の各駐車で、私たちの活動が「町立図書館」建設の土台になればと願ひながら、協力員をしていきます。 （遠藤侃子）

「埼玉の川」アラカルト

荒川と文芸——小説・随筆等——

- ① 方丈記 (鴨長明)
- ② 狂言「入間川」
- ③ 荒川日記 (森田助左衛門)
- ④ 草津道の記 (小林一茶)
- ⑤ 十万庵遊歴雑記 (釈敬順)
- ⑥ 白石先生神書 (新井白石)
- ⑦ 富士山紀行 (高田彦九郎)
- ⑧ 甲子夜話 (静山松浦清)
- ⑨ 結城使行 (水野燭郎)
- ⑩ 原政日記 (原政)
- ⑪ 溪より溪へ (若山牧水)
- ⑫ 冬晴れ (千家元庵)
- ⑬ 入川谷山荘日記 (前田夕暮)
- ⑭ 山窓寄語 (前田夕暮)
- ⑮ 秩父の印象 (田部重治)
- ⑯ 分水嶺 (高橋玄洋)



- ⑰ 丘は花ざかり (石坂洋次郎)
- ⑱ 秩父国民堂 (西野辰吉)
- ⑲ 堀の道 (横田道)
- ⑳ 私の秩父地図 (井出琢六)
- ㉑ 武州鉢形城 (井伏鱒二)
- ㉒ 秩父山権 (田山花袋)
- ㉓ 銀の川 (水上勉)
- ㉔ 箱根の坂 (司馬遼太郎)
- ㉕ おんな三代 (小林初枝)
- ㉖ 因水系 (森村誠一)
- ㉗ 鍵のかかる棺 (森村誠一)
- ㉘ 熊谷次郎 (富田常雄)

- ㉙ キューボラのある街 (早船ちよ)
- ㉚ 赤いらせんかいたん (早船ちよ)
- ㉛ 死んだ川 (野口富士男)
- ㉜ 思ひ川 (後藤明生)
- ㉝ 天の園 (打木村治)
- ㉞ 大地の園 (打木村治)
- ㉟ 支流を集めて (打木村治)
- ㊱ プラズム村誕生 (西沢正太郎)
- ㊲ 武蔵野 (根岸進)
- ㊳ 青山白雲 (牧野吉春)
- ㊴ 高麗神社の祭の笛 (坂口安吾)
- ㊵ 旧鎌倉街道 (芳賀善次郎)

「荒川総合調査報告書 4」
(埼玉県編・発行)より作成

「清流」への努力

名水百選 風布川・日本水

荒川の上流、玉淀湖に注ぐ風布川。その風布川の源に日本水がある。環境庁が昭和六〇年三月に選定した名水百選に県内で唯一選ばれたのが、ここである。釜伏山北面的中腹、百m余の大岩壁下部から湧き出て、古来潤れたことがないといわれる。その冷たさの為、一杯しか飲めなかった日本武尊の伝説をもち、「一杯水」の別名がある。現在、保存会が周辺の清掃を行ったり、地域住民による環境浄化の心配りがなされている。



ワースト1からの脱出・不老川
昭和五九年秋、環境庁は水質が日本一汚れている川は不老川だと発表。不老川は、東京都瑞穂町から流れ始

め、入間・狭山を流れて川越市内で新河岸川に注ぐわずか十七キロ、名前がちよと変わっているという以外、どうということもない川だった。それがこともあらうにワースト1の烙印/そうした流域の人たちの危機感が、「TOSHI TORAZU」という研究集録を出す不老川トータル研究会を生んだ。現在、流域四市と不老川生活排水対策推進協議会による「河川シンポジウム」も開かれ、昭和六一年度には4位になるが、いまだワースト5以内と、まだまだこの闘いは続けられている。

編集後記

川は、わたしたちの祖先の時代から、人々の生活のすみずみにまで、並々ならぬかわりをもってきました。その恵みの川が、いまいたるところで、危機に瀕しています。埼玉の河川も例外ではありません。秩父をこよなく愛する作家の高橋玄洋さんは、荒川を「埼玉の母」と称え、利根川の研究で著名な本間清利さんは、利根川の流域変遷と人々のかかわりの歴史を、克明に説明して下さいました。「母の有難さを知るのは、母を亡くしてからだ。荒川の有難さは、埼玉の地図から荒川を消してみるとよく判る」と高橋さん。母なる川が、なくなってしまうのは、表紙は清水武甲さんの「荒川の清流」、このすがすがしい流れをどこまでも、いつまでも守りたいものです。